

実体経済の動向

◇生産、ゆるやかな上昇へ

2月の鉱工業生産(季節調整済み)は、前月(+2.0%)に続き+1.2%と増加をみ、3ヵ月ぶりに前年同月の水準を上回った。昨年後半を通じて弱含み横ばいに推移した生産は、このところ資本財、生産財を中心にゆるやかな上昇に向かいはじめたようである。

2月の生産を特殊類別ないし業種別にみると、耐久消費財と資本財の増加が目立つ。耐久消費財は、前月減産をみた民生用電気機器の反動増が主因とみられる。一方資本財は、機械とくに一般機械(ボイラー・原動機、土木建設鉱山機械など)の増加が中心であり、これには、輸出向け、造船・電力向けなどの完工集中という特殊要因も響いている。しかし、資本財(輸送機械を除く)の動きとしては、前年1～3月期をピークにその後一貫して減勢を続け、10～12月期には引締め時の水準を下回るまでに落ち込んだあと、本年1、2月とかなりの増加をみており注目される。次に生産財も引き続き増加をみた。ただこれには、高率操短下にあるのは横ばいを続けている鉄鋼、繊維などの生産水準が、季節調整(1、2月は例年減産期)の結果実勢よりやや高目に出ていることも若干考慮しなければならない。一方、建設資材と非耐久消費財は減少した。建設資材では、セメントはむしろ若干増加(前月における雪害、定期修理による減産の反動)したが、ガラス、亜鉛鉄板などの減産が響いているようである。また非耐久消費財は、繊維2次製品の減産が主因とみられる。

なお3月の生産(速報)は-1.0%と減少した。これは資本財が1、2月と高水準を続けた一般機械反動減を中心に大幅に減少したためである。しかし1～3月をならしてみると、建設資材、消費財の弱含みに対し資本財、生産財の水準はかなり高く、鉱工業全体としても10～12月を1.7%上

回っている。

一方2月の鉱工業出荷も、前月低調(-0.7%)のあと+3.9%と増加した。これには雪害による前月減少の反動増(繊維、化学、窯業など)や、輸出向け、電力向けなどの一部大型機械の完工集中なども響いているが、ならしてみても、生産同様このところ若干の上向き傾向を示しは始めている。2月の動向をみると、建設資材の微減を除き各財とも増加し、とくに機械(一般機械、輸送機械)を中心に資本財の著増が目立つ。このところ低迷ぎみの消費財も、耐久、非耐久財とも増加したが、これは主として、前月民生用電気機器、繊維2次製品中心に落ち込んだことの反動とみられる。一方建設資材は、セメント増加の反面鉄骨の停滞が響いて微減となった。

2月のメーカー製品在庫は、-1.5%と昨年4月以来初めて前月比減少をみ、在庫率指数もかなり低下した。しかしこれには、前月みられた雪害による出荷減、在庫増の反動が響いており、在庫指数の水準としては12月よりは高い。もっともその内容を見ると、事務用機械、エヤコンディショナーなど需要増を見込んだ強気の在庫が増加(従来強気の見込み生産から在庫増をみていた時計、扇風機などは出荷期を迎え減少、汎用モーターなども季節性を考慮すれば減少とみられる)したほ

生産・需給動向(鉱工業)

(季節調整済み、増減率は%)

		37年	4～	7～	10～	38年		
		1～ 3月	6月	9月	12月	12月	1月	2月
生 産	指 数	129.3	129.6	128.6	127.7	126.8	129.3	130.9
	前期(月)比	2.1	0.2	-0.8	-0.7	-1.6	2.0	1.2
	前年同期(月)比	15.7	11.0	4.7	0.8	-0.5	-1.1	2.8
出 荷	指 数	125.1	128.6	125.2	127.3	128.3	127.4	132.4
	前期(月)比	2.0	2.8	-2.6	1.7	-0.4	-0.7	3.9
	前年同期(月)比	12.8	10.5	3.0	3.7	3.5	2.8	6.0
製 品 在 庫	指 数	153.6	160.1	164.4	170.2	171.6	177.9	175.2
	前期(月)比	7.6	4.2	2.7	3.5	0.5	3.7	-1.5
	前年同期(月)比	35.0	35.5	33.6	20.2	20.2	16.8	13.5
	在庫率指数	121.4	127.2	129.6	133.7	133.7	139.6	132.3

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。
前年同期(月)比は原指数による。

か滞貨的色彩の強かったものの一部にも需要の持ち直しや生産調整の奏功から漸減気配を示すもの(薄板、金属加工機など)もみられる。金融の緩和基調とあいまって、こうした内容の変化からみると、在庫圧迫の度合いとしてはほぼ峠をこした感がある。2月の動きを特殊類別にみると、資本財は一般機械の出荷増大を映じて微減、建設資材も、セメントの順調な出荷、ガラスの減産などから減少、また非耐久消費財もかなりの減少となったが、これは繊維2次製品を中心に前月増加の反動とみられる。一方耐久消費財は民生用電気機器、ピアノなど、また生産財は鉄鋼、非鉄関係を中心に、それぞれ増加した。

この間2月のメーカー原材料在庫をみると、輸入分は引き続き減少したが国産分の増加から+1.7%と増加をみた。しかし、国産分の増加も1月にみられた繊維市況の回復につれ機屋筋が一時的に糸手当をふやしたのが中心であり、原材料在庫の積極的積み増しの動意は総じてなお鈍い。先行

き輸入素原材料は、現在の在庫率水準(2月86.5、引締め前のボトム36年1月93.7)や昨秋来の輸入手当の動向からみて、ある程度の積み増しが行なわれるものとみられるが、国産分については、当面目立った積み増しの行なわれる公算は少ない。一方1月の販売業者在庫は織物、電気銅など中心に+3.1%と引き続き増加した。

なお設備投資関連指標の動向をみると、まず資本財出荷(輸送機械を除く)は1、2月と大幅な増加をみ、また機械販売高(船舶を除く)も、季節性を考慮してみれば、10~12月を底にやや上昇きみにうかがわれる。また、2月の機械受注(海運を除く民需)は引締め後はじめて前年水準を上回り(+0.9%)、底入れがはっきりしてきた。従来から堅調であった化学、繊維工業などからの受注が中心であるが、鉄鋼、機械などからの受注にも、きわめて低い水準のなかに若干の底入れ気配がうかがわれる。もちろんこうした各種指標の動きのなかには、前記のように一部大型機械の完工集中

や、輸出の好調などの事情もあり、直ち

に設備投資活動の立ち直りにつながるものとみることにはできない。ただ、このところ業界の設備投資計画に対する態度は、企業家心理の好転につれて、従来からの強気業種(石油化学、合繊、自動車など)を中心に動意が強まってきている。本年度設備投資計画に関する最近の各種調査をみても調査時点が新らしくなるにつれて強気化しており、投資総額で

需 要 関 係 の 指 標

	37 年 3 月	6 月	9 月	12 月	38 年 1 月	2 月
素 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	122.2 (102.7)	117.5 (102.2)	108.9 (94.7)	110.0 (94.7)	106.6 (90.7)	107.5 (91.4)
うち 輸 入 分 (在 庫 率)	124.8 (98.7)	120.5 (101.1)	105.6 (91.7)	108.0 (91.2)	106.3 (87.9)	104.7 (86.5)
製 品 原 材 料 在 庫 (在 庫 率)	129.4 (103.9)	121.3 (102.4)	117.2 (96.4)	116.6 (96.8)	115.4 (92.4)	117.1 (96.2)
販 売 業 者 在 庫 (前年同期(月)比%)	138.7 (21.7)	146.4 (19.1)	149.9 (15.6)	164.5 (20.8)	169.6 (22.5)	
	37年4~ 6月平均	7~9 月平均	10~12 月平均	12 月	38 年 1 月	2 月
機 械 受 注(海運を除く民需) (前年同期(月)比%)	億円 420 (-47.7)	488 (-45.7)	404 (-30.0)	403 (-23.8)	405 (- 6.9)	469 (0.9)
機 械 販 売(船 舶 除 く) (前年同期(月)比%)	億円 902 (15.1)	1,003 (11.9)	836 (- 4.8)	872 (0.4)	758 (3.9)	828 (- 2.7)
資 本 財 出 荷 (輸送機械を除く)	142.1	136.7	127.8	128.9	139.8	148.6

(注) 在庫、出荷は通産省調べ、季節調整済み指数(35年=100)。

機械受注、販売は企画庁調べ。

販売業者在庫の前年同期(月)比は原指数による。

もほとんどの調査が前年度を上回る結果となっている。

◇商品市況、底固め商状続く

3月から4月前半にかけての商品市況をみると、繊維の一部に一時小反落がみられ、燃料、セメントも弱含みをみせたが、その他は鉄鋼の強含みをはじめ総じて底固い動きを持続している。

鉄鋼は、3月以降大勢強含みに推移し、厚板、棒鋼、山形鋼などは小反発のあと、3月央から4月にかけてさらに小幅続伸をみせた。繊維も、総じてじり高ないし強保合いに推移したが、綿糸が3月末ごろやや弱含みをみせ、毛糸も3月中旬から4月初めにかけて反落商状を続けたのが目立った。もっともその後毛糸が若干ながら小戻しに転じ、綿糸も落着き商状を続けている。さらにこれまで市況立ち直りの遅れていた非鉄が、銅の小反発を中心に地合いに明るさを加え、4月にはいつてからは亜鉛、鉛も反発をみるなど立ち直し傾向がはっきりしてきた。このほか紙や化学などがこれまでの持ち直し傾向を持続、また砂糖が海外

高から引き続き高値を更新している。この間、木材は保合いに推移、セメント、揮発油などは弱含みとなり、石炭は不需要期接近から軟化した。

このところ全般に、市況の動きに底固さが加わっているのは、生産調整による供給抑制の持続という大きな背景があるにせよ、実需面で季節需要や輸出需要(鉄鋼、化肥など)のほか、業況の好調な一部業種からの需要増(建設、自動車からの鉄鋼需要など)など部分的ながら明るさが広がってきたためである。また期末決算を控えて懸念された換金売りが、金融緩和もあってほとんど姿をみせなかったことも市況の明るさをました一因となっている。しかし、実需筋の買付け態度は、とくに積極化したとはいえず、したがって当面の商品市況は、まだここで大きく上げていく地合いではなく、需要が徐々にふえるにつれて底固め商状ないし市況強含み傾向が一段と広がりつつあるのが現状である。

生産に対する業界の大勢も、まだ市況の回復ないし維持を先決とみており、当面供給抑制基調が

卸 売 物 価 の 推 移

(単位・%)

	引締め*			最 近 の 推 移							
	33/11~ 36/9	36/10~ 37/10	37/11~ 38/3	38年 1 月	2 月	3 月	3 月 上 旬	中 旬	下 旬	4 月 上 旬	
総 平 均	+ 5.8	- 3.2	+ 1.9	+ 0.6	+ 0.3	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	保 合	
食 料	+ 2.8	+ 0.2	+ 4.3	+ 0.2	+ 0.6	+ 0.2	+ 0.4	保 合	保 合	+ 0.2	
織 維	+ 8.9	- 4.3	+ 9.1	+ 3.8	+ 0.7	+ 0.7	+ 0.3	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.3	
鉄 鋼	+ 6.3	- 11.3	+ 1.0	+ 1.7	+ 0.2	+ 0.5	+ 0.1	保 合	+ 0.5	+ 0.4	
非 鉄	+ 7.8	- 7.1	- 0.3	- 0.2	+ 0.1	+ 0.4	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.1	- 1.4	
金 属 製 品	+ 12.0	- 4.2	- 0.5	保 合	- 0.1	- 0.1	保 合	- 0.1	- 0.1	保 合	
機 械	- 2.2	- 1.6	- 0.7	保 合	保 合	保 合	保 合	保 合	保 合	保 合	
石油・石炭	- 7.9	- 2.7	+ 1.6	- 0.1	- 0.5	+ 0.1	- 0.1	+ 0.2	保 合	+ 0.3	
木 材	+ 37.6	- 4.2	- 0.8	- 0.2	+ 0.3	+ 0.1	+ 0.1	- 0.1	- 0.1	- 0.1	
窯 業	+ 6.4	+ 3.7	- 0.4	- 0.2	保 合	保 合	+ 0.1	保 合	- 0.1	- 0.2	
化 学	- 3.0	- 4.3	+ 0.1	- 0.1	保 合	+ 0.2	保 合	+ 0.1	+ 0.3	+ 0.1	
紙・パルプ	+ 7.7	- 5.4	+ 2.2	+ 0.2	+ 0.5	+ 1.0	+ 0.3	保 合	+ 1.0	+ 0.1	
雑 品	+ 18.3	- 0.2	+ 0.3	保 合	+ 0.8	- 0.7	- 0.2	- 0.2	- 0.4	- 0.1	
工 業 製 品		- 3.4	+ 1.6	+ 0.8	+ 0.2	+ 0.3	+ 0.1	保 合	+ 0.2	保 合	
非工業製品		- 2.6	+ 2.9	+ 0.2	+ 0.4	- 0.1	+ 0.1	+ 0.2	- 0.2	+ 0.2	

(注) 38年1月改定の新指数(35年基準)による。

* 印は前基準指数により算出(工業製品以下は不詳)。

大きくくずれるとはみられない。しかしそうしたなかで、需給引き締まりの目立つ鉄鋼の一部品目(軽量形鋼、薄板などの一部)、亜鉛をはじめ、セメント、人絹糸、石油、化肥などには操短緩和ないし増産への動きがみられるなど、若干の変化がきざしつづけることは注目される。

3月の本行卸売物価は、こうした商品市況を反映して前月比+0.2%、4月上旬も保合とここ5か月にわたって続騰した。昨年10月をボトムに3月までの卸売物価の反騰は+1.9%となった(前回回復期もボトム時以降同期間に+1.9%)が、その中心は繊維、食料であり、この点前回の騰勢の中心が鉄鋼、非鉄金属製品などであったのと対照的である。また、3月の小売物価(東京)も、食料品の値上がりから前月比+1.2%と騰勢を改めていない。

この間、3月の消費者物価(東京)は、住居、光熱、被服、雑費などが微落の反面、野菜、果物、砂糖などを中心とする食料の上昇が響いて前月比

+0.9%の続騰となった。

なお2月の輸出物価は、生糸、冷凍まぐろ、丸鋼などの上昇から前月比+0.8%と続騰した。もっともこれまで輸出物価の上昇を主導した繊維品が、綿糸の反落もあって、騰勢やや鈍化したため、上げ幅は前月(+1.8%)を下回るに至った。一方輸入物価も、粗糖、原毛、アメリカ大豆の続騰と原油、重油のフレート高を映じて前月比+0.8%の続騰となった(前月+1.2%)。

◇貿易収支ほぼ均衡基調

3月の国際収支は、経常勘定では前2か月に引き続きかなりの赤字となったが、資本勘定が流入超となったため総合で7百万ドルの黒字を計上した(誤差脱漏-14百万ドル)。輸出は伸び悩みのうちに高水準を続けているが、輸入の漸増から貿易収支が3百万ドルの受超にとどまったうえ、貿易外収支が利子配当、手数料などの支払増を主因に31百万ドルの大幅払超となったため、経常収支は28百万ドルの赤字となった。一方、資本収支は、長期資本が大阪府・市マルク債、ADRの発行代り金やインパクト・ローンの受入れにより25百万ドルの受超となったのに加え、短期資本も、米国市銀農産物借款の返済(22百万ドル)、ユーロ・マネーの流出などがあつたにもかかわらず、輸入ユーザンスの大幅増加を主因に24百万ドルの受超となったため49百万ドルの黒字を記録した。¹⁾

貿易収支について、季節性を考慮した基調をみると3月はわずかながら赤字、1~3月を通じてみても若干の赤字とみられるが、12月に例年以上の積み急ぎがみられたため1月の輸出の実勢は多少高くなるものと思われるので、こうした事情を考慮すれば、現在の大勢はほぼ均衡を保っているものとみられる。今後当面の貿易収支についても、輸出は最近の先行指標からみて、多少の増勢持ち直しがみられる一方、輸入も原綿毛、原油などの既買付け分の入着、決済が一巡すれば、その水準で落ち着くことが期待されるので、今後ここ当分はほぼ均衡基調を続けるものと予想される。ただ、ユーロ・マネーについては、その取入れ指導金利の

消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位:%)

		36年 度中	37年 度中	最近の推移		
				38年 1月	2月	3月
消費者物価 (東京)	総合	+7.3	+7.9	+1.7	+1.1	+0.9
	食料	+7.5	+10.7	+3.6	+2.4	+2.5
	家賃地代	+3.8	+6.3	+0.1	+0.2	+0.1
	サービス	+14.4	+12.2	+1.4	+0.2	-0.1
	公共料金	+6.1	+0.3	保合	保合	+0.4
	その他	+3.6	+3.2	-0.5	+0.3	-0.9
	被服	+6.7	+6.6	+0.8	-0.4	-1.2
	光熱	+3.7	+0.2	+0.2	-0.2	-0.2
	住居	+6.1	+2.8	+0.3	+0.4	-0.1
	雑費	+8.2	+6.8	+0.2	+0.3	-0.2
小売物価	総平均	+5.0	+5.5	+1.6	+0.9	+1.2
	(食料を除く)	+4.2	+2.0	保合	-0.1	-0.4
	食料	+5.5	+8.0	+2.8	+1.8	+2.1
	繊維	+2.1	+2.8	+0.1	-0.6	-1.4
輸出入価	輸出	-0.9*	+3.4	+1.8	+0.8	
	輸入	-2.3*	+1.1	+1.2	+0.8	

(注) *印は36年4月~37年2月中。

引下げなどによる内外金利差の縮小に加え、出し手筋の事情(共産系諸国の遊資引上げなど)もあり流出ぎみとなっていることが注目される。

なお、37年度中の貿易収支(為替ベース)は、輸出4,874百万ドル(前年度比+18%)、輸入4,582百万ドル(同-8%)、差引出超292百万ドル(前年度入超864百万ドル)となった。

為替収支の推移

(単位・百万ドル)

	37年 7~ 9月	10~ 12月	38年 1~ 3月	38年 1月	2月	3月	37年度 合 計
輸 出	411 (337)	448 (369)	381 (351)	320 (293)	373 (340)	446 (419)	4,874 (4,123)
輸 入	355 (424)	371 (416)	404 (392)	396 (382)	375 (372)	443 (423)	4,582 (4,987)
貿易収	56 (Δ 90)	78 (Δ 47)	Δ 23 (Δ 42)	Δ 24 (Δ 89)	Δ 2 (Δ 32)	3 (Δ 4)	292 (Δ 864)
貿易外収	Δ 13 (Δ 11)	Δ 21 (Δ 10)	Δ 19 (Δ 14)	Δ 10 (Δ 10)	Δ 23 (Δ 17)	Δ 31 (Δ 16)	Δ 225 (Δ 139)
経 常 収	43 (Δ 101)	56 (Δ 57)	Δ 42 (Δ 56)	Δ 86 (Δ 99)	Δ 25 (Δ 49)	Δ 28 (Δ 20)	67 (Δ 1,003)
長 資	34 (9)	23 (17)	19 (10)	4 (Δ 2)	36 (Δ 1)	25 (35)	297 (173)
短 資	Δ 42 (Δ 2)	Δ 26 (3)	22 (76)	105 (160)	Δ 43 (48)	24 (20)	29 (456)
資本収	Δ 8 (7)	Δ 3 (20)	41 (87)	109 (158)	Δ 7 (47)	49 (55)	326 (629)
誤 差	Δ 2 (Δ 7)	Δ 13 (Δ 4)	Δ 8 (Δ 6)	20 (Δ 35)	4 (6)	Δ 14 (12)	Δ 91 (Δ 62)
総 合 収	32 (Δ 101)	40 (Δ 41)	7 (25)	43 (24)	Δ 28 (4)	7 (47)	302 (Δ 436)

(注) カッコ内は前年同期(月)額、各期月平均。

3月の輸出は年度末という事情もあって前月を大きく上回ったが、増勢としては前年同月比+6%(為替ベース)と1、2月より低下(季節調整済み比較では前月と同水準)し、年初来の伸び悩み傾向を改めていない。商品別(通関ベース)にみると、鉄鋼、機械、光学機器などは依然好調を保っているが、その他は昨年中における上伸ぶりに反して概して不振の域を出ない。もっとも、先行指標の動きから判断すると、輸出が当面さらに伸び悩みの度を深めるおそれはまずないように思われる。すなわち、3月の信用状は前年比+5%とやや低位にとどまったが、1~3月をならしてみれば前年比でなお+9%の水準、季節性を考慮し

ても、ほぼ前期並みとみられる。なお、輸出認証では前年比2割増の高水準を維持しているが、以上を総観すると、輸出は、その伸び率こそほぼ横ばい程度とみられるが、ここ当分なお高水準を続けるものと期待される。ただ先行指標には、対米輸出の増勢鈍化傾向が目立っており、成行きが注目される。

3月の輸入は為替、通関とも引き続き増勢を示

輸出認証の内訳

(単位・百万ドル)

	37年 7~ 9月	10~ 12月	38年 1~ 3月	38年 1月	2月	3月
織 維	114 (+14)	119 (+7)	94 (+3)	83 (+6)	96 (+3)	103 (+1)
化 学 品	20 (+39)	19 (+21)	25 (+30)	19 (+40)	25 (+22)	31 (+32)
金 属	68 (+51)	74 (+41)	80 (+71)	76 (+132)	75 (+47)	88 (+57)
機 械	126 (+24)	119 (+5)	112 (+23)	96 (+22)	99 (+6)	141 (+40)
雑 品	42 (+33)	36 (+25)	33 (+33)	26 (+55)	35 (+37)	36 (+18)
合 計	448 (+23)	457 (+15)	415 (+21)	364 (+31)	403 (+12)	477 (+21)
(季節調整額)	439	422	464	490	426	475
米 国	135 (+31)	127 (+19)	118 (+23)	102 (+44)	120 (+21)	132 (+12)
ア ジ ア	98 (+26)	106 (+9)	103 (+21)	91 (+37)	101 (+12)	118 (+18)
欧 州	53 (+45)	61 (+50)	51 (+20)	42 (+26)	50 (+8)	60 (+27)

(注) カッコ内は前年同期(月)比増減率(%)。各期月平均。

季節調整はセンサス法による。

アジアは香港、インド、インドネシア、フィリピン、琉球、シンガポール、韓国、台湾、タイ。

欧州は英国、西ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ギリシア。

対米輸出信用状の推移

(単位・百万ドル)

	37年 1~3 月	37年 4~6 月	37年 7~9 月	37年 10~ 12月	38年 1~3 月	38年 1月	2月	3月
金 額	115	123	122	122	120	118	114	129
同 上 前 年 同 期 比 (%)	+46	+39	+27	+18	+5	+5	+14	-2
季 節 調 整 済 み 額	116	122	122	123	122	123	128	115

(注) 各期月平均額。

した。昨年末ころから買付け増加をみた繊維原料の輸入が為替、通関面にはっきり現われてきたほか、食料、石油などが高水準を持続しているためである(食料のなかで、砂糖が数量は前年に比べ減少しているにもかかわらず、価格暴騰により輸入金額では著増しているのが目立つ)。現在の輸入水準は前年同期をやや上回っており、また季節調整済み額でも昨年夏ころ(ボトム時)に比べ10数%高いところにきている。こうした輸入の漸増は、輸入原材料在庫食いつぶしの一巡による輸入増と繊維原料にみられる若干の在庫回復が主因である。しかしそのほか、食料や石油に対するすう勢的な需要増加が加わっており、また、ごく最近では生産の上昇傾向がみられることも、輸入水準を引き上げる一因となっていることが注目される。もっとも、当面生産活動が、かなりのテンポで活発化するとは考えられず、原材料輸入ないし在庫回復に積極的な動きはまだみられない。3月の輸入承認にもいくぶん落着き傾向が現われており、当面輸入が大きくふえるおそれはまずないとみられる。

輸入原材料の在庫状況を見ると、2月は原綿毛の在庫補充買い分の入着がまださほどの量に達しなかった一方、鉄鋼原料の在庫減少がなお続いているため、全体としては引き続き微減した。しか

し3月には原材料の通関がかなり増加しており、4月も同様入着が多いとみられることから、在庫はその面から増加ぎみとなっているものと推測される。

輸 入 承 認 の 内 訳
(単位・百万ドル)

	37年 7～9月	10～ 12月	38年 1～3月	38年 1月	2月	3月
食 料	56 (59)	74 (48)	74 (57)	59 (48)	84 (63)	78 (60)
原 材 料	218 (291)	267 (223)	274 (236)	268 (214)	285 (250)	267 (244)
原 綿	27 (37)	37 (23)	45 (32)	41 (29)	51 (34)	42 (33)
原 毛	20 (27)	24 (21)	31 (27)	28 (19)	36 (30)	31 (33)
鉄 鉱 石	21 (21)	20 (17)	19 (18)	18 (16)	21 (17)	19 (19)
く ず 鉄	10 (35)	8 (23)	11 (15)	13 (13)	9 (17)	11 (15)
石 炭	12 (13)	11 (7)	10 (10)	14 (7)	12 (11)	5 (11)
石 油	38 (40)	61 (35)	57 (35)	57 (34)	61 (39)	54 (32)
木 材	23 (26)	24 (26)	26 (18)	23 (19)	23 (16)	30 (20)
鉄 鋼	5 (19)	4 (12)	5 (12)	3 (10)	8 (15)	5 (10)
機 械	51 (108)	61 (40)	72 (55)	97 (65)	68 (57)	50 (42)
その他共計	378 (542)	454 (365)	475 (403)	480 (380)	503 (429)	443 (402)

(注) カッコ内は前年同期(月)額。各期月平均。